

校内研修計画の概要

1 研修テーマ

分かって動けて、かかわって
～児童生徒への適切な支援を通して、自己有用感を高める授業づくり～

2 昨年度の成果と課題

昨年度は、「児童生徒が主体的に活動へ参加できる授業づくり～分かって動けて、かかわって～」というテーマを掲げ、研修を推進した。

昨年度も、上越教育大学 准教授 村中智彦様 を招聘し、2回にわたりご指導いただくことができた。第1回目の研修では、「やりとり」の指導の意義や、指導方法等についてご指導とご講演をいただいた。当校の児童生徒の実態を見ながら、様々な実践例などをもとに、授業のつくり方、教師の支援方法、学部別の支援のポイント等について、具体的に分かりやすくご教示いただいたそれにより、その後の授業づくりの方向性が明らかとなり、具体的なイメージをもって授業に取り組むことができた。

第2回目は高等部の研究授業の参観とご指導をしていただいた。授業としては全体的に良かったこと、マナー等を焦点化して教える場面が必要であること、マナーや振る舞い等は低年齢からの指導が重要で、教える際は様々な場面を想定したり、アレンジを加えたりしていく必要があること、そしてマナーが身に付くことは、就労や社会生活への適応につながるなどについて、わかりやすくご教示いただいた。

年度末に行った職員アンケートの結果からは、全職員が「専門性の高い講師による指導を受けることは有意義である」と捉えていることが分かった。

このようなことから、講師からの指導を継続的に受けることは、教職員が日ごろの自分自身の支援の在り方について客観的に振り返り、自信をもつことにもつながるとともに、知識を広げ、専門性を高めることができる良い機会であったと言える。

年度当初に職員研修を行った。そこでは、『児童生徒が主体的に活動へ参加できる授業づくり』の捉えや「授業づくりのポイント」、「かかわり」について提示し、職員が共通理解する機会をもつことができた。その後、学部ごとの研究授業及び協議会を実施し、「一人一実践」と称した全職員によるテーマに基づいた授業実践に取り組んだ。

研究授業では、「人的・物理的環境設定」において、特に大きな成果を収めた。児童の実態をふまえて目的に応じたバリエーション豊かな支援ツールが作成されことや、教師の位置取りや役割分担を明確にできたこと、教師が児童生徒の反応を待って働き掛けられたこと、などが挙げられる。また、「参加の機会」については、様々な工夫から、機会が確保された活動が促されたといえる。そして昨年度から取り組み始めた「かかわり」については、ものや人とかかわる場面を意図的に設定することで、様々な力を育むことができたが、特に、社会性や自己有用感の高まりが見られた。また、授業後は、全職員でVTR視聴による授業参観と協議会を行った。協議会は全職員で行う全体協議と小・中・高の学部職員が縦割りの小グループを構成して行う二つのスタイルで行い、充実した協議を行うことができた。小グループの協議では、テーマを焦点化して取り組んだことで、より深い議論が展開された。

全職員で取り組んだ「一人一実践」では、各種教科・領域の取組があり、幅広くテーマに基づいた実践を積み重ねることができた。また、授業づくりを通して、職員の理解も深まり授業スキルもアップし、児童生徒の成長へとつなげることができた。

以上のことから、児童生徒が「分かって動ける」場面は増え、主体的に活動に参加できる姿が育まれた。

課題としては、

- 支援を精選する必要がある。
- 授業を終えた時に児童生徒がどのように変容したか、児童生徒の姿から、支援が適切であったかどうかを振り返る必要がある。
- 人やものとの「かかわり」の場면을意図的に設定する活動を通して、社会性や自己有用感を高めることは明確になった。また、参加の質を高めるためにも、仲間で互いに支え合える集団作りは不可欠である。そのために、人との「かかわり」を様々な場面で設定し、取り組み、さらに社会性や自己有用感を高められるとよい。
- 児童生徒の様々な実態に応じ、より円滑なコミュニケーションをとれるよう、各学部で ICT の活用の方法を検討していく必要がある。

などが挙げられる。今年度の研修の中で改善を進めていく。

3 今年度の方針

これまでの研修の成果・課題を受け、今年度は「分かって動けて、かかわって～児童生徒への適切な支援を通し、自己有用感を高める授業づくり」を主題とし、さらなる向上を目指す。

一昨年度、昨年度に引き続き、「分かって動ける授業づくり」をベースとし、「児童生徒の変容」に着目して授業改善に取り組む。本時の目標を達成するために支援を精選し、設定した支援環境が適切かどうかを考える機会をもつ。そして、適切な支援で児童生徒が主体的に活動へ参加する姿を育みたい。そのために、年度当初に授業づくりのポイントを明らかにし、職員間で共有するとともに、評価基準を明確にして授業づくりに取り組む。

また、「かかわり」については、教師や同級生、上級生、下級生、地域の方など様々な「人」とのかかわりを中心に取り組む。その中で自己有用感を高めることで、地域で豊かに自分らしく暮らすために必要な社会性の基礎を培っていきたい。

4 研修の具体的方策

(1) 「分かって動ける授業づくり（主体的に活動へ参加できる授業づくり）」の捉え

一昨年度に行われた上越教育大学村中智彦先生の講演から、授業において児童生徒が『分かる→動ける（参加する）』ことが、主体的に活動へ参加できることにつながることを示された。教師が児童生徒に手厚い支援を行うのではなく、教職員の適切な働き掛けや、教材、教具などの支援ツールの工夫で動ける授業づくりを進め、授業本来の目的を達成できることを目指していきたい。

(2) 授業づくりのポイント

①支援環境設定（分かるための手掛かりの配置、教職員の支援）

- 「いつ、どこで、誰と、何を、どのような順番」で行うかについて、以下の環境設定を行うことで児童生徒に分かってもらうことができる。
- 人の手厚さに頼る支援から脱却し、主体的な姿を育むことができる。
- 人的支援の在り方に着目する。特に、プロンプトとプロンプトフェイディング、教師の位置などを重視し、支援の在り方を考える。

<物理的支援環境>

- (A) 教材・教具、支援ツールの効果的配置
- (B) わかりやすい動線
- (C) 児童生徒の発達段階や障害特性にあった支援ツールの利用
- (D) 色や形、大きさなどを工夫し、理解しやすい表示
- (E) スケジュール、手順書の提示 など

<人的支援環境>

- (F) 教師の位置や動線、役割
- (G) 児童生徒への効果的な支援の仕方
「プロンプト」と「プロンプトフェイディング」「分化強化」
- (H) 教師同士の相互の連携・他の子どもの位置、役割

※「物理的支援環境」「人的支援環境」の定義については、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校研究紀要第30集よりからの引用を添付する。

②児童生徒の参加機会を増やす

○参加機会を増やした上で、個に応じた尺度で活動量の多さをほめる。「たくさんできる自分はずごい。」「たくさんできたね、まる。」「前よりもできるようになったね。」「目標よりも多くできたね。」という活動量の多さに支えられる姿や評価を目指す。

③参加の質を高める

○参加活動の機会を増やした後に、参加の質を高めていく。以下の<ア>～<オ>が参加の質を左右すると考えられる。

<ア>行動を起こす手掛かり

- ・環境の中にある手掛かりから見いだして行動を起こすことができる。

<イ>行動の正確さと素早さ

- ・誤らずに適切な行動ができる確率を高める。
- ・子どもが望んでいる結果を効率よく得ている。

<ウ>行動の選択と使い分け

- ・場面状況や文脈に応じて適切な行動を選択する。

<エ>行動の切り替えと修正

- ・行動を起こした結果が望ましくない時に別の行動に切り替えたり、修正したりする。

<オ>行動を支えるもの

- ・教師による賞賛が支えている行動は、その人の不在のもとでは生じにくくなる。教師の支えがなくても仲間が支えてくれる、さらに人の支えがなくても学習や作業活動にしっかりと参加している自身に支えられる、自分の仕事や行動が教師や仲間のために役立っていることに支えられる姿。

④本当にその支援は必要かどうかを確認・調整し、授業後に振り返る。

○授業プランを立案した後に、①～③のことについて確認し、最小限の支援で行えるようにするために、支援について確認・調整する。実際に授業をし、振り返る機会をもつ。

(3) 自己有用感の捉え

当校では次のように定義する。

「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」という経験を通して育まれる感覚

(4) 「かかわり」の設定について

- ①「自己有用感を構成する要素」A、B、Cいずれかもしくはすべての要素を取り入れる。
- ②どのような場面で、どのようなかかわりをもたせるかを考える。
- ③かかわりの対象や学習形態を考える。

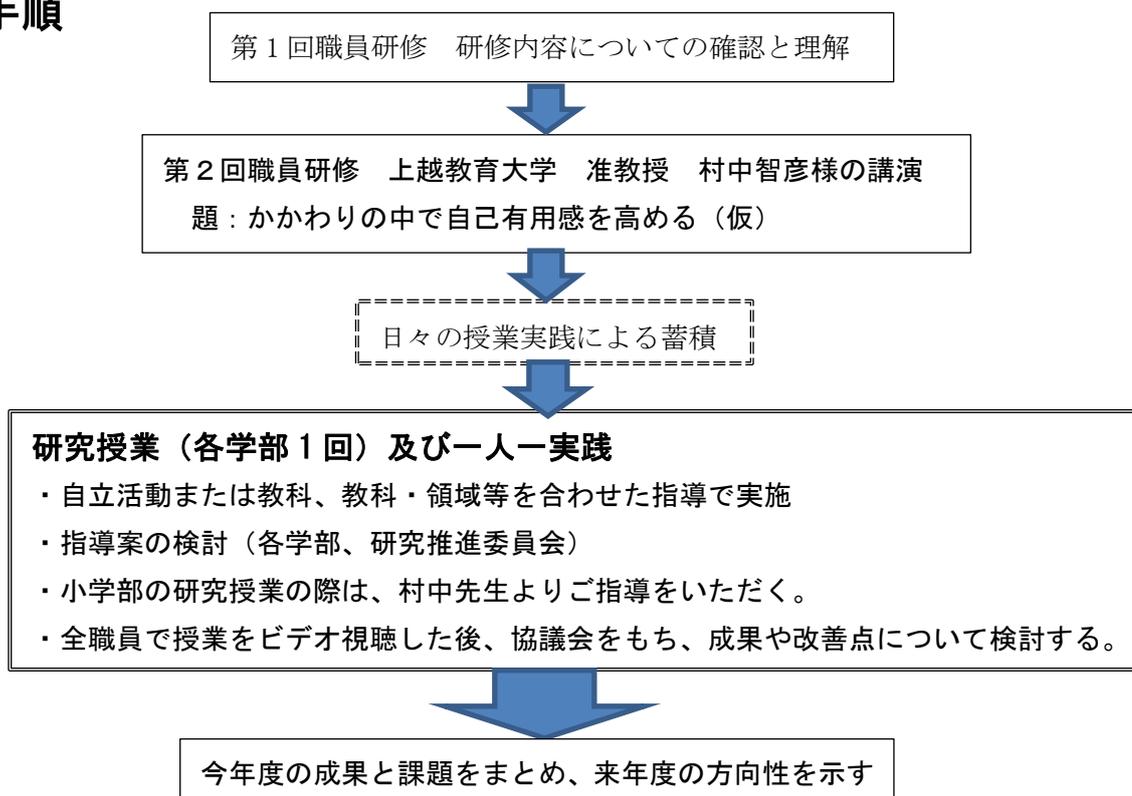
「自己有用感」を構成する要素

- A「存在感」：他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感
- B「承認」：他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況
- C「貢献」：他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況

(5) 協議会について

- ①小グループによる協議（中学部、高等部の研究授業）
3人程度の児童生徒を抽出し、その児童生徒について協議を深めるグループ、授業全体を見るグループなど、グループごとに話し合いの焦点を絞り、協議を行う。グループ協議終了後、発表の機会をもち、共有する。
- ②全体協議（小学部）
①と同様の内容で行うが、協議は全体で行う。

(6) 手順



5 研修計画

期日	テーマ研修・研推主催の研修	年間指導計画作成	その他（他主催）
		年間指導計画に基づく実践開始	
5/1(火)	校内研修①(校内研修の概要説明)		
5/31(木)	校内研修② 講師 上越教育大学 准教授 村中智彦 先生 「かかわりの中で自己有用感を高めるために」 ・「一人一実践」開始		
6/19(火)	・研究授業① 中学部 協議会		
8/1(水)			公開講座2018
8/21(火)			市教協統一部会 南中学区を語り合う会
8/22(水)			特別支援教育研修会
8/25(金)		1学期の年間指導計画の見直し締め切り	日本PTA全国研究大会
8月その他			校内人権同和研修会
9月	・研究授業② 高等部 協議会		
11/21(水)			人権教育同和教育研究会
11/29(木)	・研究授業③ 小学部 協議会 講師招聘		
12月~	・「一人一実践」終了 ・研修のまとめ作成開始、起案終了後印刷開始 ・「家族住まいる」実践報告締め切り		
12/21(金)	・伝達講習会		
1/5(金)	・見附の特別支援教育原稿締め切り(小学部・中等部) ・見附の学校教育原稿締め切り(研推)	2学期の年間指導計画の見直し締め切り	
2/28(火)	・研修のまとめ綴じ作業	3学期の年間指導計画の見直し締め切り	
3/8(水)		年間指導計画完成	

<参考文献>

「特別支援学校&学級で学ぶ1『学びあい、ともに伸びる授業づくり』村中智彦編著 明治図書
「生徒指導リーフ『自尊感情』?それとも『自己有用感』?」生徒指導・進路指導研究センター-文部科学省国立教育政策研究所より
「栃木の子どもの自己有用感調査(小・中・高)リーフレット(教師用)「高めよう!自己有用感」
栃木県総合教育センター